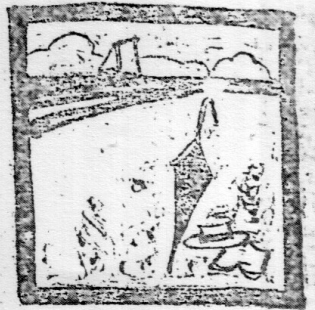




旅費

水野 仙子

館主が二三日關西の方に旅行をして居るので、その留守中は珍しく暢々とした気分で過された。女中が番茶の土瓶を持つて上つて来る頃になると、さあ一寸一休みといったやうな眼色でみんながそれを迎へた。かさ／＼と机の下に風呂敷を披く音がして、きまつて誰か竹の皮包みなどを出した。みんなにまたそれを持つやうな顔色があつた。おしたちの團子、どら焼、時にはしやれて空也餅、そんなものが毎日代りばんこに誰かの風呂敷にくるまれてあつた。

雇主の目の見えない日は、仕事も時間が來ればきつちりしまつたもので、夏の初めの五時といへば、日が入るまでにはまだ十分の光りがあつた。ちどりはいつもの道の角でみんなと別れると、急に操られて居た絲が弛んだやうな心地になつて、くだらない輕口に惜しげもなく漂はせた笑ひの影を、慌て、掻き消すやうにその顔を緊きしめた。

今日一日の仕事も濟んだといふ放たれた氣分に僅かな満足はありながら、これから夜にかけての時を彩る何ものもないことに思ひ至ると、急に泥水が染み込むやうにつまらなさが其胸を浸した。その味のない時間を短くされるだけ短くする

旅費

ために、ひつかへしてみんなの後を追はうかとも振かへつて見たが、朝出掛けに天氣豫報を信じて用意して出た傘と高下駄に氣がつくと、それも厭になつて、たゞいつもの道筋を歩くより外はなかつた。

ちどりは、此頃戰記もの、出版を目論んで居る或書肆——それも經營まだ日の淺い——に、當分の間寫字生として雇はれて居るのである。その家は根岸にあつた。豫約募集をして居るので、その事務の方の係りの女二人と男二人女二人の寫字生が、朝の八時から蒸暑いやうな二階の一間に籠つて仕事を初める——星月夜顯晦録、義經記、そんなものが片つぱしから寫されて行つた。昔の字に馴れないちどりは、時々解らない言葉に出會つて苦んだ。それに随分肩の凝る仕事だつた。

一人で働いて喰べるといふことに爲つた殆りと興味は、いつか其姿を消してあとに尾をひいたものは、苦しい息苦しいそして色の褪めた生活であつた。張り合ひのない、その癖ちり／＼と焦せる氣分の絶えない連續が、ちどりの踏んで行く日々であつた。今の仕事だつて限りのある仕事である。豫定のものだけが寫し上げてしまひへたら、もうあの事務室に用

のない體になつてしまふのである。絶えず怠る者はないかと注がれて居る館主の光る目の下に、一枚く〜と急いで行くその末は、また何處かに働く口を探さなければならぬ——さう思ふと今からもううんざりしてしまつて、仕事の絶えた時の不安な心持に面をそむけたいやうな氣持になつた。

いつまでこんな状態の月日を過ぎなければならぬのだらう——？この頃はもう經濟からそれを選んだ自炊も厭になつた。すべてが面倒になつた。投げ遣りになつた。頭のはつきりして居る朝と、しんみりともを思ひたいやうな夕暮方とにでも、せめて落着いて本でも讀むことが出来たなら——

ちどりはふと、此間から考へて居るそのことを思ひ出して、時の移動にでも少しの彩をその日々に見出したいと思つた。そして今度は手許が若しくも、思ひ切つて賭つきのところを

探してみようと思つた。それからちどりはまだ陽のあるのを幸ひ、二三日前にふと目にとまつた貸間の札を心當てにして、少しばかり廻り道をした。そこは阪本の電車の通りだつた。貸間の札はまだ取れずにあつた。小さな醫院の門内に其家があるの、打水のしてある敷石におづ／＼下駄の音を低めて、

勝手口の方の細い露路を行くと、突き當りにそれらしい二階建ての家があつた。格子戸に手を掛けて案内を乞ふと、直ぐに障子が開いて馬鹿に金齒の光る女が顔を出した。いつも女が女に會つた時に經驗する、ちろ／＼する眼を全身に浴びながら、ちどりは貸間のことを聞いた。二階に案内されて上つて見ると、二間を襖で仕切つた六疊で、あまり新しくはないが、襖つた感じのする部屋であつた。下宿料をこの主婦らしい

女から聞いた時、ちどりはなんともいへぬ心細さをその女の前に隠した。十二圓といへば今のちどりの収入を殆ど全部提供しなければならぬのであつた。

『學校は？』と、その女は聞いた。女一人には廣過ぎるやうな曖昧なことを言つて、ちどりは下りしなに隣りの部屋を覗くと、柱に掛けてあるしほれた飛白の袷から、眼覺し時計の乗つて居る机のあたりに、如何にも男の匂ひが充滿してゐるやうであつた。それと、薄暗い玄關に亂雑に脱ぎ捨てゝあつた澤山な子供の下駄とに、ちどりは未練なくそこを出た。

細い道へ、曲り曲つた露路へといふやうにはいつて行くと、大抵共同水道のあたりに女達が群がて居た。それらがなんともなく氣忙しい氣分をつくつて、時を求めて歩くには相應しいやうな、またうら／＼びしいやうな思ひがちどりの胸を描き撈つた。

或家の一間は暗かつた。丁度屋根裏のやうな感じのする天井の低い二階で、光線の取れるたゞ一方の窓は腰が高く、煤けた障子を引くと、黒く焼けた隣りのトタン屋根の埃っぽい上から、薄墨色の夕暮の陽が僅かに疊の敷を數へさせた。三疊ばかりの薄暗い店に染糸を繰つて居た二人の女工らしい女が、強い眼光でちどりを見送つた。息も苦しいほど肥つた内儀の、大きな眼は又其女達に意地が悪るさうだつた。

貸間の札がおきまゝに斜めに上繪師の瓦斯燈の柱に貼つてある。歸りかけた足をとめて、兩側に並んだ長屋の小瀟洒したのに望みを掛けてはいつて行くと、突き當りて格子戸に「神占」の看板が掛けてある。勝手が違つたやうに思つたが、

表札はやはり貸間のある家の姓と合つた。ふと面白いといふやうな氣分が萌して、いきなり潜りを開けて踏みかげんに聲をかける。と、老年らしい彈力のない返辭が聞えて、暫くすると、顔の弛んだのろいやうな老女が其處に立ちはだかつた。

『え、そりあ賄つきにしてもようござんすが、狭いんですよ。』

『幾疊です？』

『三疊でございます。』

机を一つ置けば寝るところも無くなつてしまふ——さう思ひながら、ともかくも其部屋を見せて貰はうとすると、

『此處ですが……』といつて、老女は、多少此邊りには華かに見える身なりをして居るちどりに、少しく恥づるやうな氣ぶりであつた。襖を開けると、その袖の下から薄暗い部屋が覗いた。古葛籠などがまだ置かれてあるらしかつた。ふと見ると、足をちいこめて丸い脊中をこちらに向けて人がひとり横になつて居る。ちどりはぎよつとした。よく／＼見ると、灰色の撫で髪の下に、赤黒い毛が枕にしてあるのだつた。部屋といふのはそれと、玄關とも居間ともあるいきなりの六疊とより外はない家なのである。土間の障子を開けると直ぐに赤黒くなつた毛布が敷いてあつて、古い机が据ゑてある。薄い坐蒲團が敷いてある。小さい長火鉢がある。手馴れた筧竹と算木が、型の如くに机の上に置かれてあつた。

『まだ／＼自分の生活には冗慢がある——』

ちどりはかう思つて自分の心に鞭打つた。遅ばれた晝寢に寝過したものであらう。あの老人の手枕のまろ寢——それ

が、話し聲が耳にはいつて氣がついても、出るに出られなかつたのであるやうな氣がしてちどりはならなかつた。あの背中の丸さ——

濡りのない道に高下駄は足の痛いものであつた。

木戸口の柱に貼つてあるちどりの小さな名刺の、字劃が靡ろなほどに日が暮れつゝあつた。緩んだ鼻緒をしつかり握りつめて歩いて居たので、足の拇指が草臥れて痛い。

『只今。』と上りはなから聲をかけると、

『へえ、お歸んなさい。』と、いつもの通りな小母さんの調子が聞えた。

裁板の上に電燈を低く下して、急ぎのものらしい女物の八つ口をせつせと締めて居る。そのまゝちどりが梯子段を上らうとすると、

『宮城さん、書留が来て居りましたよ。』

『書留？ さう？』

ちどりは思ひ掛けないことなので、一足あげかけた足を下して怪訝さうに立止まつた。

『一寸待つて下さい。今直ぐに出してあげますから。』と、腰をたてかけながら、小母さんはちよいと針の手をとめるのを惜んだ。

漸く最後に抜いた糸をぼきりと手際よく齒で噛み切ると、

『お判がわかりませんでしたからね、うちので受取つて置きましたよ。』といひ／＼、大きな眼鏡をすり上げながら起つて

来て、火鉢の引出しから大形な封筒を出してちどりに渡した。

『どうもお世話さま。』

ふと裏書をかへして見て、ちどりは思ひ當つたやうにそのまゝぎし／＼と二階に上つて行つた。なんとなく胸が安かくなかつた。

机の上に投げやるやうに置いたアルミの辨當箱が、如何にも空虚な貧乏くさい響をたてた。横倒れにべたりと机の前に坐つて、横裂けのする封筒の口を切ると、豪傑肌の大きな文字が、巻紙の裏にまで墨をにじませて居る。ちどりはその巾廣く巻かれた巻紙を繰つた。

『拜復、早速の御返書満足に奉存候。そんなことならお安い御用決して御心配は之あるまじく、早速旅費として金十兩封入仕候。思ひ立つたらなんでも遣つて見ることに、是が倫敦とか巴里とかなら、少しは億劫がつてもよろしく候へど、高が内地うちのこと、殊に、後髪引かれるやうな係累も無之事と（推察在罷候）なれば、當分思ひ切つて御出でなさる可、地方の研究も満更無駄事にては御座なかるべくと被存候。田舎もなか／＼暢氣にて、殊に腰掛けには持つて来いに候。社長も小生の話に依り、寧ろ歓迎の意味を洩し候位なれば、決して居心地悪き所には致さる積りに候。筑紫野の叢に君の才筆を得て、大に家庭欄の矜りと致度、田舎者對手には東京者は兎に角大に巾が利き申候。

最早御承諾済みのことなれば、効能書は此位にて止すべく候。可々何日頃御出立の運びにならるべく候や、なるべく早く願上候。』

ちどりは讀み終つて、結果があまり早く無造作に來たのに思ひ惑つた。膝の上に落ちた爲替券の金額に疑乎と見入りながら、暫くは身動きもせずに考へ込んだ。

立て籠めてあつた障子を開けると、すぐ家の臺石の岸を流れて居る藍染川が、泥溝のやうな黒ずんだ水面をして、瀬戸物の缺片や夏蜜柑の皮などの芥を激むて居る。時早い蚊の唸りがかぼそくそこらに起つた。

思ひ出した様にちどりは電燈のスイッチを捻きつた。赤味を帯びた其光りが、部屋一ぱいに蔓つて居た薄闇を逐ひ退けると、押入れの唐紙の前に掛けてあつた衣紋竹の脱ぎ捨てが、思ひ切つて肌を露はにしたやうな紅裏の嬌きを見せた。坐蒲團のメレンスの、ちら／＼はいつた紅にも女らしい潤ひが見え出したのに、ちどりは微かな満足を覺えながら惱しく窓の闕に倚つた。

ふと思ひ出した人に手紙を書いたのが初まりだつた。その人とは元からあまり親しく交つて居たのでもなく、年始狀の時に思ひ出す程の知己に過ぎなかつたが、ふとした氣分からそれは郵便を樂しみにして歸つて來る日々に、一度でもその失望を避けたい爲めに、自分からあちこちへ撒いた種のうちの一つであつた。

Y氏はいつか郷里に近い福岡に行つて居て、そこで一つの新聞を起し、自分は二面の編輯長をして可なりの勢力を揮つてゐるしかつた。ちどりの何處か放抛氣味な、低級な反撥的の諦めの氣分が見える手紙を見ると、その新聞の家庭欄を擴張して、ちどりを婦人記者として迎へるやうに計つてもいい、

と言つて来た。ちどりは其好意に心動いた。それに報酬もよかつた。両親が失くなつた後のちどりは、田舎の兄から何をしようとする行動を自由にされて居るので、確りした覺悟もつかなくなつたけれど、心が動いたまゝに返事を書いた。旅費の心配のことなども書き添へるのを忘れなかつた。

獨りで呑み込んだやうなY氏の手紙を見ると、その無造作さが頼母しく、力強くも思へるけれど、かういざといはれては、さすがにあれもこれもと心残りなことが群がつて來るのであつたかと思ふとまた、知らぬ土地のもの珍しさや、喰べてのあとに着替への一枚も出來さうな其報酬や、その間には語學の勉強も出來よう、本も讀まうといつたやうな希望が、早くも頭にその根を植える。そこから新しい自分の生涯が展けて來るのかも知れない——と思ふと、急に息づまるやうな都合の生活が厭はしく、それを振り捨てるのになんの未練もないやうでもあつた。

ちどりは誘はれるやうに机の上の爲替に手をのばした。使ひ途の定つた金ではあるが、それでも手許にあるといふことが暖いゆつたりしたものが懷にはいつたやうで不思議に心強かつた。

少し心が落着いて來ると共に、ちどりは急に空腹を覺え出したので、戸棚を代用にして居る押入れの上の隅を開けた。お菜になりさうなものは何もなかつた。けれども今から何かこしらへることの面倒さと思ふと、何も彼も我慢する氣になつて、やがて香のもの、端をさざみに下へ降りて行つた。

いざ暫くでも東京を離れるとなると、たとひ煮酒屋の鈴の音にでも名残りが惜しまれるのであつた。それがうす甘い情緒を誘つて、搔き搔られるやうな譯もわからない思ひにほろ／＼と涙ぐましくなつたり、机を並べて居るみんなにそれとなく地方行をほのめかしては、譯もなく勇みたつたりして居た。ちどりは妙に足許の地につかないやうな四五日を過した。別段今の仕事を止めるのに、むづかしい手續きとはないけれど、それにさへ譯もなく一日二日と日が經つて行つた。さうして月の半ばに日がかゝると、月給の都合やら、月の初めといふ定りのいゝ日に事を決めたいといふやうな、さもない理由を見つけ出して、今日は明日はと日を惜しんで暮した。

今まで勘ねたやうな意古地な心から、見る氣もなかつた芝居などに、あれもこれもと興が湧いて、立ち見の群から豆のやうに動く煌かな舞臺を、いつにない充實した心持で眺めて居ることもあつた。銀座街の柳の葉の繁りにも、人知れぬ微妙な思ひが湧いた。

目覺しく翼を擴げて來た上野の青葉の下の交番に、巡查の白い服が目につけて來た。その足許に續いて乾いた道が、水撒車の晝いて行く僅かな線を、やがて影繪のやうに薄めて行く。そんな日が梅雨の晴れ間にあつた、かと思ふとまた、雨氣を含んだ不機嫌な雲が、降り出す機端を狙つてむづかつて居るやうに、額を窘めておれ／＼しい氣分をそる日が續いた。

夏になると一瘦せ瘦せねばすまぬちどりは、暑いにつけ鬱

陶^{たう}しいにつけ、夏に馴^なれるまでの間に一病み病むのが常のやうであつた。それを十分心に飲み込んで居ながら、ふとした氣分の緩^{ゆる}みから、制^{せい}すに制^{せい}し切れなかつた渴^かきに、ちどりは或夜廣小路のとある白いレースを潜^{ひそ}つてアイスクリームを飲んだ。その散歩から根津の宿に歸るまでの間にも、氷屋の店々が妙に床しくてならなかつた。宵に喰^たべた油ものが、丁度海綿のやうに胸に蟠^{わだかま}つて居て、いくらでも水氣を吸ひ込むやうに思へた。部屋に歸つてかくも、ちどりは自分に隠れるやうな心持で水道の水を飲みに出た。

『遂々!』

ふと可笑しいやうな、惡落着きに落着いたやうな氣分で自分を眺めた時、ちどりは根津の家の二階に横はつて居る自分を見出した。蚊帳の吊り手を斜かひに兩方から集めて、そこに氷嚢を吊したあとの麻糸が、ふら／＼と頭の上に揺れてゐる。搔卷の上に兩手を出して眺めると、氣のせいばかりでもなく青白く細らんだ腕に、混亂した青さを見せて靜脈が這つて居た。よく／＼見て行くと、右の手の中指の先に、ペン軸の觸れたあとが、その日のまゝになつて居るインキの色に残つて居る。

今から思ふと、すべてが夢であつたかのやうにぼんやりとして居る。朝出掛けに極く下痢したのを氣にして、喰べる物も喰べないで出たのであつたが、蒸されるやうな部屋でありながら、時たま吹き込んで來る風が妙にひや／＼と肌^{はだ}に觸つ

て、寒氣ともつかずに體が慄えた。机を並べて居るみんなに顔色が悪いと言はれてからは、急にどうにもかうにも我慢が出来なくなつて、その時はどうする氣もなく館を出てしまつた。途中で辻車に乗つた。そのまゝ近所の小さな醫院に車を着けさせて、ひや／＼する藥の香に包まれながら、診察室の寢臺に體を横へた時、ちどりは安心と不思議な惑亂^{わくらん}に思はず精神が遠くなりかけた。――
急激な腸胃カタルに腦貧血を起しかけたのだと醫者が言つた。齒を喰ひしばつていくら忍ばうとしても、意地惡く抉ぐる疼痛に堪えられなくなつて、注射の爲めに幾度下の小母さんを使ひに立てたか知れない――かうして快くなつて見れば極りの悪いほど世話になつた小母さんに、お禮には何を買つたものだらうなど、ちどりは考へ出した。どんなものでも今は惜しくなかつた。
時々未練らしく／＼と腸をつゝく痛みに摺えて、慌てゝ横を向くと熱に蒸れた髪^{かみ}の匂ひが胸惡く鼻をつく。嚇すやうなその疼^{いた}みがやがて薄らいて行くと、枕許の藥嚢を卷いて居る眞新しい名札に、横書きされて居る自分の姓名を、不思議なものでも見るやうに眺めて居るうちに、ちどりはいつかうと／＼となつて行つた――。

ひと厄を振り落したやうな喜悅に心を軽くして、憔悴^{せうすい}の見えるちどりが再び仕事に通ひ出した頃、十圓の旅費は跡方もなく消えて居た。それが恰も神の援助で、もあつたかのやう

に、ちどりはそれを藥の代とするのに躊躇しなかつた。Y氏には病氣のことを少しく重く長びくやうに書いて、暫くの間待つて貰ふやうに言ひ送つた。その間にかく旅費の工面をする積りだつた。

五六日見ぬ間に如何にも眞夏めいて來た光りが、折り目の汚れた薄色の洋傘を通して、眩しくちどりの目を射つた。廣小路の乗り換へにあちこちして居る人だかりに、薄物を纏ふた女達は美しかつた。ほんのりと赤味を萌した肌、襟の、い一つ浴衣の意氣なものと、紹縮緬の羽織の肩をぬけてだらりとしたのも、東京でなくては見られぬすつきりとした姿であつた。

ふとちどりの胸には軽い妬みが燃え上つた。それは、自分が間もなく此華かな土地を去つて、假令完全ではなくても、若さの彩りを都會の流行に外れて過さねばならぬといふことに依つてであつた。急にちどりは、自分の體の廻りに土臭い匂ひを嗅ぐやうな氣がした。

旅費の責任が重く、ちどりを苦しめた。

一月はいつか經たうとして居た。ちどりの旅費はなかく思ふやうに行かなかつた。強いて作ればその位のこととはどうにかならないこともなかつたけれど、たゞ責任を感じるばかりで、心は少しも旅立ちに向つて進まなかつた。Y氏からは一度ばかりそれとない催促の手紙が來たけれど、今暫くと言ひ送つたまゝ、ちどりは中毒のやうな都會の執着と、息苦

しい責任との間に迷ひ、つて、一日逃れにその日を送つて行つた。

夏はいよいよ長けて行つた――。

Y氏からは其後暫く消息が絶えたが、ふと或日、あの話があつて以來、毎日送られて居る其新聞を何氣なく披いて見た時、ちどりは思はず聲をたてないばかりに驚いた。Y氏は急激な赤痢に罹つて、無造作に亡くなつて居たのである。ちどりは板のやうな胸を抱へて暫く茫然として居た。その驚愕は複雑であつた――。

巴里より

小杉 未醒

御無音致候、武俠社の連中はけしからぬ連中にて、近頃社内にてニスコートを作りし由、大兄もたまにはお出向きにや、テニスの爲のみに早くかへり度候、

今年は大分歸朝者多く候、梅原は此間立ち、澤邊は今月、和田水谷は此の秋、小生滿谷徳永は此の冬に候、
山本君第三回の版畫にかゝり居候、小生は裸女を書き居候、――六月二十三日――